梅颸餘香

67-539
1200501281777
67
39

始

530

梅隨餘香

67
539

香餘颺梅

帝國圖書館藏

拙聲

藕塘生

緒　言

古今東西偉人の出づるや、そこに必ず賢母がある。勤王の權化・絶代の文豪・稀有の孝子などゝ、幾樣にも讃へられる賴山陽先生にも、世に稀なる賢母梅颸夫人が存在する。山陽先生の天賦の文才は、其の母に依つて助長せられ、史學の趣味・忠孝の觀念・不撓の精神なども、亦母に依つて培植せられたと謂つてよい。其の梅颸夫人の一生を稽へるに、婚前既に淳良なる品性を備へ文筆に長け、趣味が豐であるなど、よく文豪の母たるの素質を備へて居つた。加之婚嫁後も常に婦德の修養と趣味の向上とに努め、一層其の輝を增した。それが內には或は一代五十九年に亘る日記となり、或は年々の歌稿となり、或は時々の隨筆となつて發露し、外には遂に偉人山陽を出現せしめたのである。若し夫れ其の主婦としての務に至つては、夫に仕へて貞節を盡し育兒・看護・紡織・裁縫等、其のすべてを自ら掌理して、よく家政を齊へた又母としての子女教育に當りては、至慈なる愛育と、周到なる輔導とに依り只管大器たるの素質を養ふに努めた。山陽先生が幼時羸弱なる質を以てよく成長し、波瀾重疊たる青年期に於て、遂に自棄に陷らなかつたのは、一に母の功に歸せざるを得ない。嗚呼梅颸夫人の如きは、眞に偉人の母とし、良妻賢母の典型として、山陽先生と共に、長へに敬仰せらるべき人である。

本會は昭和十二年五月　東伏見宮妃殿下の台臨を仰ぐに當り、特に梅颸夫人の遺物、遺墨等を蒐集陳列して台覽に供し奉つた。其の際廣島縣愛國子女團は、其の台覽品の主なるものを輯めて寫眞帳を謹製し、「梅颸餘香」と題して獻上した。本會は此の寫眞帳が、一般女性の修養及教育上重要なる資料たるべしと信じ、今回之を複製して世に頒つことゝした。

昭和十二年十二月

梅颸夫人略傳

賴山陽の母は、名を靜といひ、晩年梅颸と號した。寶曆十年庚辰二月晦日大阪立賣堀裏町の儒醫飯岡義齋の第二女として生れた。母は來島氏である。義齋は六子を擧げたが四子皆夭折し、次女靜・三女直〔後尾藤二洲に嫁す〕のみ成長した。此の二子に對する義齋の寵愛は一方でなく、深く其の教育に留意し、品性淳良にして、學問技藝に長じた女性ならしむべく努めた。殊に靜は文學を嗜み、文章・和歌を善くし、文字にも巧であつた。就中和歌は、京都の小澤蘆庵に學んで出色の譽があつた。新婚間もなく、夫春水と舅亨翁を奉じて京洛に遊んだときの紀行に依つても、其の才藻の凡ならざることが窺はれる。安政八年十一月二十歳にして、大阪の碩儒中井竹山の媒介に依り當時江戸堀北通一丁目に家塾を開いて居つた賴春水に嫁した。俊髦山陽を生んだのは其の翌年の暮であつた。他に二男一女を擧げたが、女お十〔後三穗といひ進藤吉之助に嫁す〕のみ成長し、二男三男共に夭した。二十二歳のとき春水に伴はれ、山陽と共に竹原の亨翁を訪ね、次で宮島に詣でた。其の年の暮、春水が廣島藩儒に召されたので、翌年一旦廣島に來たが、專ら廣島に居着くことゝなつたのは二十六歳のときであつた。有名なる梅颸日記を書き初めたのは、廣島着の翌日卽ち天明五年五月十三日山陽六歳のときであつた。それより終に一代五十九年の久しきに及んだ。又常に歌道を勵み、一生の歌稿が年毎の帖子となつて遺り、其の中には秀妙なるものが少くない。其の他裁縫・手藝等一として長ぜざるはなく、自ら糸を紡ぎ、機を織り、裁ち縫ひに至るまで、殆んど一手に之を調達した。子女の養育には最も留意し、就中宗家の嫡子たる山陽に對しては、其の全生命を傾注したと謂つてよい。山陽が羸弱の身を以てよく成長し、遂に偉人山陽として大成するに至つたのは、梅颸の感化と輔導の力に負ふ所が最も大である。且つ梅颸は終始廣島の宗家

に留まり、孫聿庵・曾孫誠軒・養子景讓・其の子達堂に至るまで、悉く其の養育に當り、彼の一生は全く子女の教育に捧げたといふべく、其の心身を勞したことは、洵に尋常でなかつた。春水は仕官後十數年は殆んど江戸に在勤し、家に在ること稀であつたが、梅颸はよく留守を擔當し、家政を齊へ、夫をして毫も後顧の憂なからしめた。又常に宗家の主婦として、交際周旋に懇切を極めた爲め、一族の中心として敬慕の的となつた。されば春水は深く梅颸の淑德を念ひ、歿前七日親しく梅颸の號を大書して與へた。山陽亦深く母の厚恩を肝銘し、幼時より母を思慕するの情極めて厚く、晩年は特に其の老を慰むるに努め、京都に居を定めてより、母を鄉里に省みること十數回、京畿に迎ふること四度に及び、常に承歡の誠を致した。梅颸は五十七歳にして春水に別れ、七十三歳にして山陽に先立たれたが、孫聿庵等に侍かれて餘生を樂しみ、天保十四年十二月九日八十四歳の高齡を以て歿した。墓は廣島比治山多聞院の境内に、春水のそれと並んで建てられ、墓銘は聿庵の筆で、春水先生配楳颸夫人墓と刻してある。法諡は梅颸院寛慈貞靜といひ、よく其の人柄が表現されて居る。

目次

一 題字　德富蘇峰先生書
一 緒言
一 梅颸夫人略傳
一 梅颸の二字
一 遊洛記
一 春水先生の留守訓
一 梅颸日記（その一）
一 同（その二）
一 同（その三）
一 同（その四）
一 同（その五）
一 同（その六）
一 梅颸の歌稿（その一）
一 同（その二）
一 同（その三）
一 梅颸の書翰（その一）
一 同（その二）
一 梅颸の隨筆
一 梅颸の和歌（その一）
一 同（その二）
一 梅颸の短册
一 梅颸の式紙（その一）
一 同（その二）
一 同（その三）

梅颺の二字

春水先生が良妻靜夫人に付與した號を梅颺（ばいよう）といひ、それより夫人は常にこれを用ゐた。颺は涼風の義にて、梅颺とは梅花の徐に馨る意であらう。梅と頼家とは緣が深く、廣島の舊居には、春水先生當時の老梅が今猶ほ遺存し、夫人の日記寛政十三年五月十三日の條には、次の如く記して在る。

梅きのふけふおとす、皆五斗餘り、御多門〔杏坪宅〕へ一斗遣す。

又頼諸先生中梅の字を號に用ゐた人も多い。茲に揭げた二字は、春水先生が歿前七日即ち文化十三年二月十一日、病重きにも拘らず、雄渾なる筆にて書いて與へられたものであるこのことは同日の梅颺日記に

餘一〔聿庵〕に命じ墨紙の用意し、書をあそばす。

とあり。聿庵先生の書いた「春水病間日誌」にも此の事が記してある。これを見ても春水先生が梅颺夫人の淑德を深く感ぜられた事が窺はれる。

遊洛記

梅颺夫人が新婚の墨安永九年四月二十一歳の時、春水先生と共に、本國竹原より上阪した別の享翁を奉じ、京洛に遊んだ時の紀行を、遊洛記と稱した。こゝには其の首めの數葉を掲げる。文中の詩は春水先生が詠んで書き入れたものである。

此の旅行は僅に三日に過ぎなかつたが、紀行は二十餘枚に及び、到る處の見聞せし事物や、交遊せし人々に關する感想などを、優しく雅なる文章にて綴り、歌も十餘首載せてあるこれを見ても梅颺夫人が、若き頃より詞藻豊かで、文才に長じて居つたことが知られる。

去年の冬、をものゝおしへをうけて、賴氏の家にかへる。良人の父君は〔享翁〕、千里の青海をへだてゝ、あきの國にいましける。かゝるはるけきさかひたれば、拜み奉ることのかたく、まゐてつかへ奉るはいふもさらなり、明暮に、これのみわび思ひしにはからずも今とし卯月はじめの三日、良人の弟君〔杏坪〕をぐしてのぼらせ玉ひ、はじめて御おもて拜みまゐらせ、有がたくうれしさたぐふべきかたなし。いつしかなれむつびまゐらせ、ひめもす御かたわらに侍るに、道すがらの御うた、あるは人よりこせしおもしろきふみども、くりひろげみせしめ玉ふもうれし。ほどなく京へもふのぼり玉はんとて、わらは二人したがひ奉りて、みち〳〵のみやつかへにはべりぬ。八日の夕つかた船をいだし、江にさかのぼりゆく。岸の木だちのながめもめづらかなり。夜に入て、月いとしろふすみわたれるけしきえならず。夜半ばかり雨しきりにふり、風すさびければふねかゝる。風爐やうのものようゐしたれば、さけなどあたゝめ、參らせつ。所は平かたにて有ける。いひ・さけなどうる舟ども、たがひにらうがはしくのゝしりたるも、所がらおかし。あるじかくなむ。

半夜江行興可嘉。　携妻扶老向三京華一。
蓬窓雨滴不二堪寂一。　百里離レ家如レ在レ家。

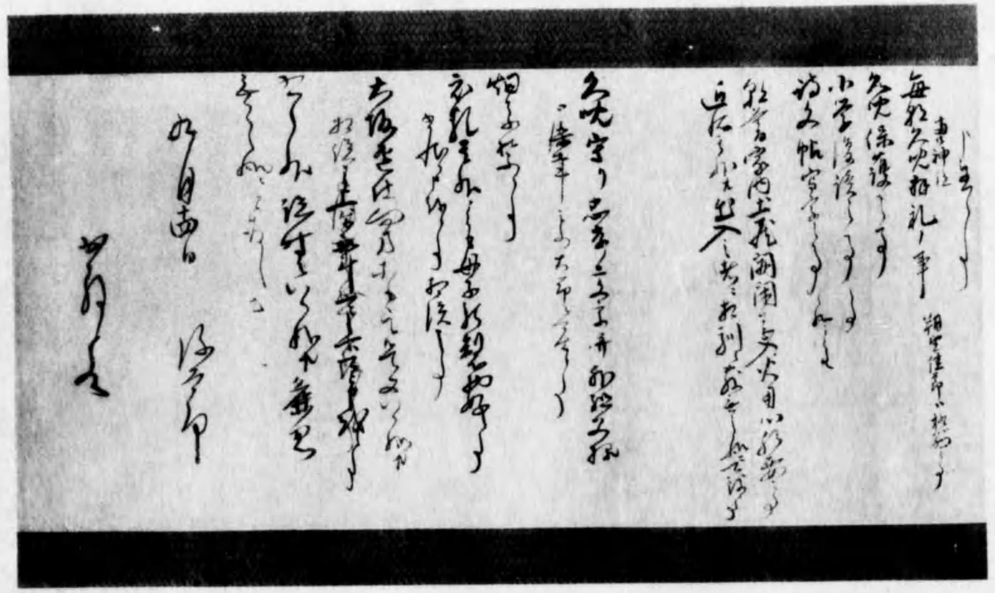
わらわも其こゝろを。

かぢまくらとまもる雨のわびしさもまぎるゝばかりむつがたりして。

こゝにてよあけ、とまをしあけ見れば、岸のあたた、野山のわか葉のけしき、いはんかたなく、いと〳〵めづらかたり。それより八幡・山崎、行かたの山々のながめ、又なくぞ覺へ侍る。よどの城、はしのけしきもめづらし。

此ころは初音やなかむほとゝぎすよどのわたりの雨のなごりに。

ほどなくふしみにいたり、竹田とかやいふ道をゆく。うしはかごもたらしたればめして、わらはらしたがひてゆく。雨そぼふりて道いたくあしければ、とかくあゆみがたく、人におくれて行ぬるを、心うくおぼしてや、わらずてふものはかせぬるに、あゆみやすくなりて、とこふにかわりしすがたのおかし。漸く高瀬川のほとりをゆく。卯の花くだす折たればや、水の音もすさまじ。あなたはもゝやまとなん。やよひのころは、大空も花にえふばかりなるよし、今はしも名殘もなく、



春水の留守訓

天明八年九月十四日春水先生四十二歳の時(梅颸二十九歳山陽九歳)、三度目の江戸上番として出發する際、妻靜に留守中の心得を書いて與へたものである。其の中には種々家政上の事もあるが、特に山陽の教育に重きが置いてある。梅颸夫人はよく此の訓を遵守し、留守中の務に缺くることなきを期した。

申置き候事

毎朝久兒(山陽先生の幼名久太郎なればかくいふ)兩御神位拜禮の事、朔望佳節は格別の事

久兒保護の事

小學復讀の事

詩文帖寫字の事、くれぐれも

朝暮家內土藏閉閉念入、火用心肝要の事

近所共外共出入の者に相馴々敷無之樣に可致候事

久兒守り忠孝の二文字並外祖父樣御染筆もの大節に可仕候事

烟草禁候事

衣類共外にても母子新製物好の事

書狀に申越候事相談の事

大阪邊仕向方等も候はゞ是又いか樣共相談の上にて取計可申候へば可被申越候事

右の外臨時にいか樣共麁忽無之樣にと存候也

九月十四日　彌太郎

お靜どの

梅颸日記（その一）

梅颸夫人は、春水先生に嫁して後六年、二十六歳の時、愛兒山陽〔六歳〕を連れて廣島に居着くことゝなつた翌日、即ち天明五年五月十三日より日記を書き始めた。これは春水先生の江戸勤番の繁きを想ひ、留守中の子女養育のことや、家事の要務を、夫に知らす目的にて起筆したものであるが、終に一生之を續けて五十九年の久しきに及んだ。日記の記述は簡明を旨とし、要點を摘記するに止めたが、閑あるときは詳に記し、旅行の際は輕妙なる紀行文体で綴り、所々で詠んだ歌を書き加へしなど、日記文の上乘といふべきものである。此の日記は、春水先生の日記と相雙んで傳記上貴重なるものであるが、一面時代の風俗史に關する得難い資料でもある。以下其の日記中、育兒、看病、裁縫、手藝、藝文等に關する各特色ある箇所を掲げる。以下〔　〕を付するは今回加へた註である。

その一

上は日記の初年に當り、屢々久太郎（山陽の幼名）のことが記してある。如何に育兒に留意せしかが知られる。春水は今とし八月上京して不在中である。下は以て家事、裁縫に精勵せし狀の窺はれるものである。日記は他人に見せるものでないから敬語は殆んど用ゐてない。

△十　月　〔天明五年梅颸二十六歳山陽六歳〕

十七日　晴。
○林主人妹病死ノ由、愛女呼びに人來。
○万（春水の弟杏坪）來問。○夜大坂ノ文認。
○ぬしやへつぎ物遣ス。

十八日　晴。
○弔書林へ遣ス。○くめ（出入の女）來。

十九日　晴。
○久太郎胡町（杏坪宅）へ行。
○自江戸（春水）書狀來ル、片田武平治持參、先月廿九日認書。

廿　日　晴。
○万公（杏坪）袖うらふじやゝ面來。

廿一日　晴。
○久太郎終日物書あそぶ。
○予しきし物。

廿二日　晴。
○植田守衞・足助家來來。

廿三日　晴。
○江戸大坂への書認出、明日御早道出。
○自江戸書狀來ル、先月十六日認、山口彦太郎使。

廿四日　晴。
○久太郎灸治、おくめ手傳、後胡町へ行。

廿五日　晴・陰。
○万公木綿衣縫遣ス。
○久太郎少灸アタリ歟不食。

廿六日　小雨・後晴。

廿七日　晴。
○林内室來見二更過辺迄。○久來來。

△十一　月　〔同年〕

廿五日　晴
○夜林内室來遊、夜半斗歸。
○又大坂ノ返啓認、明日御早道出ル由也。
○久太郎染物來ル。○万公羽織縫遣ス。

廿六日
○予久太郎表ぬふ。

廿七日　晴。
○自江戸書狀來ル、霜月四日出、御用達より。
○万公認胙ぬふ。

廿八日　晴
○久太郎郡内着物縫。○夜下女布子綿入ル。

廿九日　晴
○下女着物くけ教遣ス。

△十二月大

朔　日　晴。
○自竹原書狀來ル。○香物漬終。

二　日　晴。
○二用より元孝より万公への扇物來ル、去月五日出也。○下女りツたち遣ス。
○久太郎湯藥服林調合。

三　日　雨。
○自大坂書狀至ル、惠田歸便、久太郎賣物予染上物母下着久太郎着和予茶布子古等也。五月十七日出也。○万公羽織ぬひこむ。

四　日　晴。○林來見條談ノ事。
久太郎着物縫、大坂より來りし分。

五　日　晴。
○今井重三郎より御書翰、列吹聽、内いはる重之内來。
○竹原蓋六來。
久太郎胡町へ行。
○自江戸書狀來ル、先月十五日出。

梅颸日記（そのニ）

上は、歌道に勵み、古の歌集を筆寫し、歌も屢々詠みたることの知られるもの。下は、山陽の病氣看護につとめたことの記してあるもの。

△十一　月　（天明六年梅颸廿七歳山陽七歳）

廿　日　陰・風。

○予久初家内林家内同道小河内座へ行、暮歸。

廿一日　寒雪。

○詞林拾葉集寫初、今日半日七枚也。

廿二日　晴・後寒シ。

○万公来。江戸行物認。

○移村より重之内来ル。○寫物十枚斗。

廿三日　晴。

○自江戸への書狀認ム。○万公大久保へ招カル。

廿四日　晴。

○自江戸大坂へ書狀出ス、御早道便也。

○當月六日出江戸書狀至る。

○うつし物不出来。

廿五日　晴。

○半の叔様〔淺野齊賢の弟〕東府へ御發駕。

○久太郎拜見に行。

○但馬守様〔淺野宗恒〕御年賀和歌奉。万公モ和歌捧。

廿六日　雨。

○夏物所々へ頼、万公来取計也。着物着カヘル

廿七日　雨。

○朝林へ勸進詠歌よみ遣ス、寄花契戀也。

廿八日　雨。

廿九日　晴。

○林へ招カレ鑑かざり見ニ行。理芳来りうたよみ、初夜過歸。

△九　月　（天明七年九月梅颸廿八歳山陽八歳）

十三日　晴・陰・清光。

○江戸へ書狀出ス。

○丹藏歸省。

十四日　晴・清光。

十五日　晴・陰・雷暴・後晴。

○古川やぶれ大坂へ紙包遣ス。一昨々日あたりより書し書狀アリ。○主人のしめ表うら林堀様。村南夕。○銀九十匁遣ス。

十六日　陰・雨。

○り印帶求代十九匁。

○胡町〔香坪〕買藥用、若發セシ由。

○茂八妻より詰。

十七日　晴。

十八日　晴・陰。

○久太郎妻後より少々氣色あしく、申之刻斗大熱、折々正氣なく、かんべきノ症也。林留守、近所ノ醫師招ケ共皆留守也。漸々ニ林東〔よび〕ニ行、暮前来ル。暮過又實正ニナシ。後快ていニ而夜半斗又其キミ、其後よく寝。

十九日　晴。

○久太郎快、林見舞。

○將軍様〔徳川家治〕御使界ノ由ニ而停止申来ル。

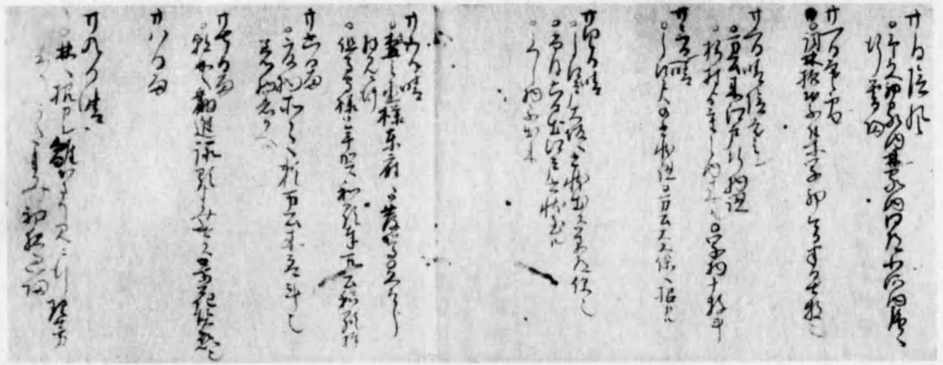
廿　日　晴。

○久太郎快、林見舞。

廿一日　晴。

○琼若付藥、黑胡麻壹合、巴豆壹両、鳶末浸古酒包、若發十日而全癒、腹以刑屏〔防ト同ジ〕敗毒散。

右は松井石龍之傳授也。



梅颸日記（その三）

上は山陽の脱藩直後、未だ所在の判らぬため一族痛心の狀の窺はれるもの。殊に九月十三日折からの清き月を眺めて、憂愁の歌を詠むなど、流石の梅颸夫人も痛く心を傷めた。これが山陽をして終世慈母の恩愛を肝銘せしめたものゝ一つとなつた。下は脱藩した山陽を迎へ戻り、一室に拘禁した當時の處置の記述してある箇所である。

△九　月　（寛政十二年梅颸四十一歳山陽廿一歳）

十　日　晴・夜四つ頃より雨。
○林より忌中御目贈。みそのよりかき贈ル。
林見廻御その夜見廻、くめ来ル。
十一日　雨。
○伊助朝飯後御多門へ行、書過歸。
○御その見廻。○林見廻、夜迄話す。
竹原書狀御多門へ来り、樣子少々わかるよし、御多門より與一伊助へ申来、傳聞。天神町どうゐんニかゝる。
十二日　雨。
○江戸へ書狀出ス、今日御早道出ル。
どうゐん来ル。
十三日　晴・清光。
○風人本共返置。
思ふことなくて見ましやとばかりに
のちのことよひぞ月に泣ぬる。
○御園書南見廻、又夜来ル。
○どうゐん貞松ばかり、靜やスミ。
○駒井敦馬見廻。
十四日　晴。
○太助竹原へ左右聞ニ遣スよし。
○みその朝の内見廻、靜あはず。
○與一今度ノ一事後初而見ル。
十五日　晴。
○御多門より叔父樣二七日とて茶のこ来ル。
○居中着見廻。
○くめ口口来り宿ス、ふしや小兒死去之由話。
○夜順迪・與一・頼二来ル。
○儀右衛門（石井豊洲）歸。

△十一月　（同年）

廿九日　晴。
○夜筆山（筆山捧覆、藩の重役にて山陽の劍道の師）口ニ（山陽後に惰二と稱せしため それ迄の假名ならん）逢度よし、此中より噂有よしに而来問。小郎（杏坪）も来ル。筆山表ニ両段々示教其、感涙忍がたき深切成次第也。二更前迄はなし其後居間ニ両酒出ス、已ノ刻斗歸らる。
晦　日　晴・暖也。
○父母の書し物見度由願との事ニ両、孝子傳（藝備孝義傳）序、靜より江戸へ行し時ノいましめのうた二三首、御多門より書来り此中書つかはし候樣ニとの事ニ両書、其外ニ遠懐のうたなど書つかはす。
○嘉六ぶね出帆、紙遣ス、諸口ニ束半紙二束 廣紙二束代九匁四分。

△十二月

一　日　晴。
○御備物アナゴ付焼御酒。（毎月一日、十五日に行ふ祭祀の供物）
○御多門（杏坪）江戸（出府）被仰付。
○筆山被參（前掲廿九日）一禮ノ文御多門へ加筆たのみ遣ス。
○敦馬来見表飯出ス。
二　日　晴。
○はた上ル、八寸半、八ツ半ニ入ル、りせ糸也。
三　日　晴・夜雨。
○伊助八ツ頃出ル、太吉かばりニ来ル。
四　日　晴。
○小郎夜来ル。
○伊助御その（遣ス、江戸敦見廻相かね。

梅颸日記（その四）

春水病臥中日々の病狀、看護及終焉のことなど詳しく記述せるものにて、多忙の央にも日記を廢せず、而も其の記述の頗る要領を得て居るなど、感すべきものである。

△二月　〔文化十三年梅颸五十七歳、春水七十一歳〕

七日　晴・陰。

○學問所御祭、尙平・維佐拜見ニ出ル。

今日御藥梅甚あしく、村田藥ニてあしらい、御吐もアリ、藥のわざ也。痰の如き物大ぶん御はき、やはり御苦痛やまず、村田とまり度是とせはやく、万四郎父子初、駒井・進藤・梶田・道味・傳九郎など、終夜詰ル。

○夜両惠美・星野來見合。御岡ハ今朝もたのミ來、あんぶく、夜も又見廻。

○夜八ツ過頃サンリせつこつ御灸、其後少々御休ミ。

○尙平夕竹原ヘ出立。

八日　雨。

○御氣促少々おだやか成方ながら（ず發し御しよく事甚減少、昨日より御藥だち、今日より惠美藥御上り。

○今朝其にも有しや、御懐中吉川ニたのみ御封じさせ。

九日　陰。

○惠美見廻。

○千齡・儀輔着、御感前之處を考へ、直ニ御あはせ不申、暫して申上候へば、早く出ル樣ニ御申。

○今朝と登ゆ、德太郎（山陽）・三穂・助十郎（御遺金ノ事、金數吉川ニ御書せ、そのわき〈遺名前員數御記。

十日　晴。

○朝夕三白見廻。

十一日　晴。

○朝三白・晩三折見廻、脈と御見せ不被成。

○夜ミそのよびニ遣、寒酒ノ事すゝめ。

○今朝かと登ゆ（餘一書庵）ニ御命じすミ紙ノ用意し書ヲあそばす。

十二日　晴。

○朝両惠美見廻、御見せ不被成。脈と御登えなされぬ御樣子、後ニ惠美ハまだ見廻不被申やと仰られ候。

△二月　〔同年〕

十三日

○晩方以の外あしく、御寢間所御かへさせ。

○今日共か、御精心御とぼしきよし被仰。

十四日

○恭照院樣御同日（淺野重晟公文化十年閏十一月十三日卒）ならんと思ひしニ、今日も先生きて居ると被仰。

○御備物の事申上候へば、病氣故十五日を御知せ申上候斗也。佐一郎（吉坪の子柔鼎）ニさせ候樣ニ被仰候。

○今ばんにてもありしや、詩會ノ事を夢ニ御覽、御はなし御聲ひきく、聞とりがたくあり し。

十五日

○御備物佐一郎一人仕。

○助十郎夜着ス。

○今日どもか、又あすにてもありしや、良吾ニ詩御よませ、御聽、御精心さだかならず。

十六日

○助十郎朝出立歸、儀右衛門同伴。

○少々御快方。

○今日共か、御氣色御何ひ申せば、心もちなんともなく、さはやかなりと被仰。

十七日

○御快方、御せい心もゆ々御儘ニ御見え被成。今日何日との事御尋申上候へば、十五日と被仰候。

今夜ニ入御喘鳴・御寢起しげく、御難儀成御樣子。

十八日

○御れおきしげく、御夜しよく御すゝめ申、かゆ吸物わんぶたニ壹つ餘御上り、夜四ツ過三白見廻、一時たらず見合歸、それより御ねぶりのごとく御靜か也、九ツ過御終。

十九日

梅颸日記（その五）

上は山陽先生が九州遊歴の歸途、母を奉じて京都に行くときの出發當日の記逸にて、平素と異り流麗なる筆にて詳しく記し、所々にて詠みし歌をも加へて旅行の樂しみが述べてある。

下は上京の途中、備後神邊の菅茶山先生を訪ね、年來の山陽に對する厚恩を謝し、歌を詠み交すなど、雅なる交遊を樂しんだことが記してある。

△二　月　（文政二年梅颸六十歳山陽四十歳）

廿四日　晴・猶雨雲たちまふ。

出たつ、映雪尼（歌友逸）はかねてかゝる事もあらばもろともにとおもひ契りおりけるが、あまりにも俄なることなれば、さはることもありていなみけれど、せちにすゝめて伴ひける。きさらぎ廿日あまり三日明はてゝ出たつ。うまごはむつかりなんと、元たゞ（聿庵）のめのとがこしらへて見せず。道藤のぬし（女三穂の夫吉之助）はじめ、見おくる人多し。元たゞは系んかうばし遙來り、雨のいたふふるもいとはず岩はなといふ所までおくる人も有。玉山堂といふ筆つくるもの年頃、己が家にいでいりまめごゝろあるものにて、それらもおくり來りて霜けしにひとつきこしめせとて、かごのまど（さかづきさし入、酒つぎてのませけるもあはれなり。みないとまをつげわかれぬ。

行かたの花におくれじと春雨にしゐて出でたつ旅ごろもかな。

海田にてしばし休らひ、奥がいた、中のむらをゆく。廣しまちかきわたりは、つねにきく所なれど、はじめて見る舟こしたをいへる所おもしろし。中のむらにて休らひ、よもぎのもちゐなんどたうべる。

あらしこがかごかきすへて休らふもこゝろありげの梅のこのもと。

落合にてわりごとうべる。ふた所の山より出る水のこの所にて落合、海田へながるゝ。

△二　月　（同年）

廿八日　晴。

とかいへるながき堤へと行つる。橋越したる所の茶亭やすみ、暮に神邊につく。裏は先へこし宿とりてあり。其所（おちつき風呂（入、何もかた付おき、夜五つ頃先生（菅茶山）をとぶらふ。此頃北條氏（霞亭）伊勢（歸省）の留守とて、其宅明てあり、其所（引受、先生夫婦出來りたいめ（對面）する。さかづき・吸物・看四五種出、夜ふくる頃（迄）話、直に此所にとまれとせちにすゝめ給ひてとまる。（宿かどや金五）

廿九日　晴。

朝おそくおき、漸くしてかれいゝ給ひおきないもとせ（茶山室門田氏の子）いでゝ物かたらひ、こし行のはなし、詩畫などとりいで見せつ。表かれいまめやかにもてなし、あるじはいとまつげて黄葉（夕陽村）舍にかへる。

としこのたにざく（短冊）かけてあり。

袖のへにやどれるかげをはづかしみ

あはれ月にもたむけつるかな。

せんしやう（茶山）のよしのゝ歌。

やまとぢは花なき里もにほふなり

よしの初せの風をつたへて。

さつまの藤きみの、此里にやどり給へることのありける時。

九重を立出てしより八重かすみ

八重の鹽ぢも春やしるらん。

せんしやうに奉る歌。

春草のごとむつびにし名殘とて

めぐみの露の猶かゝりける。

梅颸日記（その六）

上は京都滞在中の、知友との交歓、山陽夫妻の日々の歓待の狀など記述せるもの。殊に七月四日、四十五歳の山陽先生が、母の按摩をせしことを「久太郎按摩しくれる」と記せる如きは、よく母子親愛の情が露はれて居る。

下は同年京都より山陽に送られて歸る途中、大阪より播州路にかけての、樂しき旅情を述べたもの。殊に須磨の浦邊にては、茶店に憩いて夕陽の落つる景色を詠むなど、此あたりを一篇の詩と化して居る。其の際山陽先生も左の詩を詠んで、「兒献七母酬る一の情致を舒べて居る。

母座筵列兒草鞋。隔着列窓相傳杯。小歇禁店剪霜菓。兒献母酬咲頻開。京東聽妓酒如湯。江南送調看如陵。歸程一杯却可樂。回首尚都成陳迹。

△六　月　〔文政七年梅颸六十五歳山陽四十五歳〕

廿八日　雨。

○支度して乗船ニ定メ有ル所、小竹へ一寸来れとの事、女たちも相待との事ニ而いとまゑ禮旁往所、雨甚しく、風もつよく、同所ニ留メ一宿ス。くはく齋・流りやう等来話。酒宴、同所二女・其伽俊藏妻等来、琴三味弦。

廿九日　晴・陰。

○朝とく舟ニ乗八軒家也。水高く風も有、暮々供見ニ着、初夜半頃京ニ歸。

○寺川より留守に鳥粽三十来有。

△七　月

朔　晴・涼し。

○寺川よりうるろう・粽貳十来。

二　日　晴。

○足の灸。

○自留守書狀来ル、六月十四日認、だんな舟。同廿一日御早道、一緒に田中より登る、尾藤書入。三月廿八日四月十四日同廿一日道啓共来。

○篠崎へ禮書出ス、並ニ南鉄壺茶碗代ニ遣ス。

○夜岩城来、小酌して歸。

三　日　夕立・雷鳴少。

○理髪。

○いたみ酒一印大坂より着、朔日出の由。

○中井お帰より兼中見廻文、くじらおこす。

四　日　雨。

ひるねナシ、夜よくねる、久太郎按ましくれる。

○田邊飛彈来、亭ニ両暫く話。

○庄の日ニて加茂ニ執事あるよし、朝女兼両誘ひあれど雨天ゆへ其事ナシ。夕酒はやく初メル。

五　日　晴。

○久太郎へ手紙、七夕會森ニて執行のよし、待七夕題来る。

△十　月　〔同年〕

八　日　陰。

○六つ頃大坂ニ着。暫ク大川町謙藏宿尾路やニて休息。久太郎篠崎・齋藤途行、かご買などす。

○俊藏来問。○齋藤菓子箱贈、中井へ手紙やり、傘とりよせる。

茶ぶねのり尼崎行。俊藏・篠崎内ふた本竜途、尼へ七つ過着、人足遅く暮々立、夜五頃西宮ニ着。

九　日　晴。　五里。

○六つ半過西宮を立、九つ過兵庫ニて中食、舞子にて日落、茶やにて一杯口内とりしゆへつける。暮六過明石大くら谷ノ宿ニ着。

すまのうら松のしづ枝に影さして

夕日ぞ落るあはちしま山。

十　日　雨・暴風・北こち西南。

○大くら谷を雨ごみニたつ。追々風強雨吹ふり、野口ニて中食、加古川へ七つ前着。宿中谷世話、ちかふの家ニ宿ス。中谷来話。其母明石ノ孫女来會。中谷しばゝ茶をたてのます。

干菓子贈。

十一日　雨・北風つよし。

○加古川を雀の鳴時分立、鳥むしとやらいふ所にてかごたてる。

○三介へちりめんざこ中井へ贈りしを少のこし佐兵衛ノくれしかうせん（香煎）箱二つおくる。いち川庄條川をわたり小店ニとまる。

梅颸の歌稿（その一）

梅颸夫人は、若き頃より和歌を嗜み、其の頃の名高き歌人小澤廣庵の教へを受け、前掲遊洛記には、既に自詠十餘首を載せて居る。廣島に居着きてよりも、家事多忙裡にもいよ〳〵歌道を勵み、閑あれば古への歌集を筆寫し、遠近の雅客と應酬せしことなど、日記にも記してある。日常詠みし歌稿は、毎年一冊づゝの帖子となりて遺つて居る。次に掲げるは多年の歌稿中の一部である。

上なるは文化四年三月春風先生の九州遊歴の門出を送るとて詠んだものである。下も同年。（梅颸四十八歳）

やよひの末、つくしにまかりける人を送るとて。

筑紫かたつきぬみるめはあかずとも
とく歸りませ暑からぬ間に。

しらぬひのつくしの手ぶり歸り來て
君かかたるを待つゝをらん。

道すがら、吟詠し玉はんみやびを
思ひやりて。

つくし人まつらのうみにかづきせで
君がことばの玉や拾はん。

しらぬひのつくしのうみの藻鹽草
かきあつめつゝ君やかへらん。

同行の人におくる。

まつら潟唐土ぶねにこととひて
わが日本の光ませ君。

惠明上人、身まかり
玉ひける時。

此よだに佛のごとくとふとびし
人のゆくえのたのもしき哉。

北のかたの、とみに
かしらおろし玉ふときゝて。

かしこくもまことの道に入ぬとは
きけどそゞろにぬれぬ袖かは。
ぬるゝ袖哉

忍戀

色みえぬ心の花にゆるしてし
あやな涙の露ぞみだるゝ。

しのばじよつれなきまゝに
それをだに契としらばしのばじよ
たがためならぬうき名なりせば。

誰ゆへのうき名なれとていとふらん
そもすくせなる契とおもはで。
おもふ方なる

梅颸の歌稿（その二）

毎年の歌稿は半紙二つ折の帖として年毎に綴つてある。その紙も多くは歌集筆寫の際の反古などを裏返して用ゐたもので、以下薄く文字の現はれたのがそれである。次に掲げたるは文化十一年五十五歳のものである。

鄰蹋紅

柴人の山下つゝじ咲比ぞ
遅き蹋さの　火かげ成らん。

かへさまどわぬ火影とやみる。
をそきかへさも道はまどはじ。

ふる袖も照そふ斗春ふかき
かた山つゝじ色に咲けり。

久待郭公

初音まつまに
ほととぎす待よかさねていつしかと
卯月の月も有明のそら。

なが思ふ月もさかりのこの花に
おとづれやらぬほとゝぎすかも。

時鳥歌ふ初音もあづまやの
あまり雛面有明の月。

雲〳〵にいもねずまつを

聲もらすらん

歌ひ　たのみて
月にまち雨にうらみてほとゝぎす

初音まつよもいく夜とかしる。

田家早苗

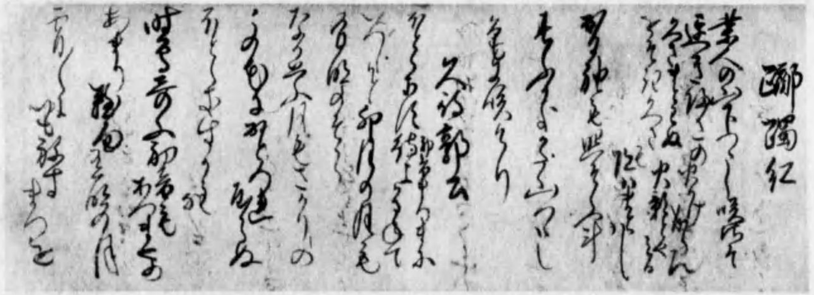
〈だて住む所は別きてめにかかる
門田のさなへまづやとるらん。
とりいそぐらん

みどり子をやどにねさせてしづの女か
門田のさなへくるゝまでとる。

水樓にて詩歌
雲の字をとりて。

まれ人をともなひつれてあそぶけふ
はれまうれしき五月雨の雲。

題圃附のために水樓へ行玉ふけるに、
わらは三穂子も行て。



梅颸の歌稿（その三）

上なるは、文化十一年八月梅颸夫人五十五歳の夏〔山陽三十五歳〕詠みたるもの。下なるは同年秋、山陽先生が入京後初めて廣島に歸省した際、喜びの情を詠んだもので、一家團欒の有樣が窺はれる。其の時別れに臨んで春水先生は「兒襄歸省賦示」と題して將來の自重自愛を誡めた一詩を詠んで與へ、山陽先生亦「發廣島奉別家君」とて門前の國泰寺の樟樹に因みて惜別の情を舒べて居る。その詩を次に掲げる。

兒襄歸省賦示　　春水

單身須自重。來往豈無期。懼矣風霜候。前途多險巇。

發廣島奉別家君　　山陽

匆々盡杯酒。遲々出門閭。回頭語諸弟。侍養煩代予。舟進洲移城漸遠。遙見送者自圧返。一株如蓋立蒲暮。猶認爺家對門樹。

年經て裏が京よりまかり
來にける時。

なつくさに露のめぐみを
うけてしも哉
はらはで露のめぐみをぞ待。
かけてむ

夕立

みな月の照日いつこに隔つらん
すゞしくなりぬ夕立の空。
植つけの雨たらわぬと歎つる
民のこゝろやうるほひぬらん。

年經て裏が京よりまかり
來にける時。

枠引わかれても
いのちあれば又もぞかゝる
圓居ありけり。

かた〳〵に引わかれても
あづさ弓いのちなりけり
かゝる圓居は。

雨にうるほふ
天地の中にうまれし民なれば
などちゝ母のめぐみなからん。

親と子の心隔つな
わかれ行雲のいく重に
遠ざかる共。

なかれくむ袖にも思ふ
かくばしき名にながれたる
川水をくみぬる人の袖に
しるけれ。

はいく〳〵に
雲井のよそに
遠ざかるとも。

さへ
くむ袖にだに先しぐれける。
なれくむ袖だにかゝり
水かみはいかに希川の
かくしからん。

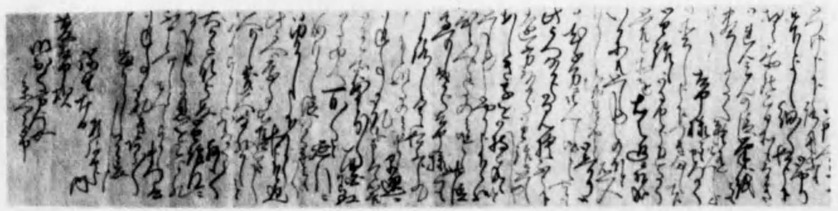
おやと子の道なへだてぞ
わかれ行雲はいく〳〵に
遠ざかる共。

みな月廿日夜、
綾雄吉郷に歸るとて、
來たりてしばし
物かたらふに、いと涼しく
更ゆくに。

九月十三夜
長月のふけゆくまゝに
影澄て身にしみ
夜のけしきかな。

風の音もむしのなくねも
身にしみて秋おもほゆる

長月のふけゆくまゝに
影澄て身にしみ
わたる庭の松風。



梅颸の書翰（その一）

梅颸夫人は、一族及知友に對し、書翰の附答を鄭重にしたことは、その遺存せるもの又は日記の記述などに依つて知られる。その書翰の文体は平易流暢で、筆蹟も亦美事である。

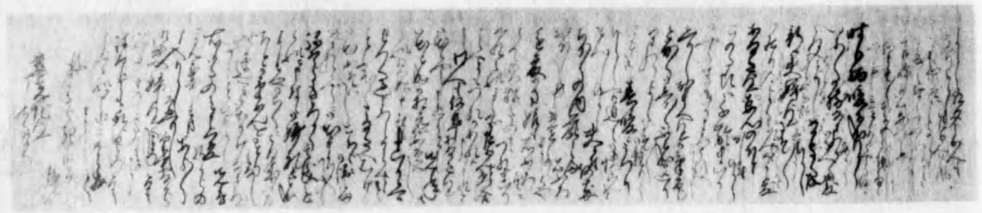
（その一）

山陽先生が京都に往くことは、年來の志望であつたが、三十二歳のとき、一年餘在留した紳逢の菅茶山の許を辭し、いよ／＼その志望を達成した。この書翰はその後、梅颸夫人が、茶山先生の配門田氏に贈つた禮狀で、山陽先生に對する慈愛の情の窺はれるものである。「文化八年三月」

先達ては細々との御文被下忝拜し參らせ候
まづ／＼其折から御揃あそばし折からの御さゝへなふ御機嫌よく御入遊ばし候よし御めでたく存參らせ候。颸々御いきましく被爲入候はんと御めでたく存上參らせ候。次に爰もといづれも相替りなく暮し參らせ候て乍憚御心易思めし被下度候。扨とや久太郎義段々御とめ被下候へども何分上がたへ登り申度存念にてとゞまり不申御ゆるし被遣候よしすでに先月六日に出立いたしまし候よし先頃より薄々其儀承知いたしまし候へどもかほど急念に登り候事とは存不申扨々自身ののぞみにまかせおやの存意に叶はぬ事をかゝりみず候段不埒千万なる事に候。あなた樣に居申候へば此うへもなき安心成事に御座候に遠方へ參り扨々不安心千万成事いかゞいたし居申候やらんとね覺にも存出し申候へばやるせもなき事御さつし被下度候しかしながら御門人がたも御つけ被下路用等も御やり被下候よし細々御被下扨々忝のこる所もなき御れんみんの段筆紙にも盡しがたく難有ぞんじ參らせ候。太中樣にもせつかく御愛し被下つきましては御世話も御させ被遊たく思召の所を右の通に相成いかにも思しめしのほど恐入參らせ候次第に御座候。御しかりも御尤千万にぞんじ參らせ候へども此うへながら御見捨不被下遠方ながら御世話に思しめしあしき子を御持被成候と思しめし御やり被下候樣ひとへに／＼たのみ上參らせ候此段慮もじながら太中樣へもよろしく御上られ被下候樣たのみ參らせ候。早速に御返事御禮等申上候筈に御座候所あまり／＼面白からぬ事ゆへ一日／＼と延引に相成參らせ候段慢承にも／＼御ゆるし被下度候。御被下候通此うへは學事出精いたし人らしき人になれかしといのり參らせ候外なく何も何も大かたならぬ御世話樣になりまし御恩をわすれ不申候へかしとぞんじ參らせ候。まづは御返事御禮旁あら／＼申留參らせ候。めで度かしく。

彌生廿日　　頼彌太郎内

菅太中樣
御おく方樣



梅颸の書翰（その二）

上は文化八年閏二月五十二歳のとき、竹原照蓮寺の慈光院（僧月雲妻女）に贈つたものにて、下は文政二年一月六十歳のとき、歌友達の映雪尼に贈つたものである。

時分柄暖に成參らせ候。いよ〳〵御揃なされ御さへ〳〵數被爲入候よしめでたく存參らせ候。新御夫婦樣さぞ〳〵御居り合ひよく候はんとめで度あなた樣御安心のほどおし計參らせ候。このたびは千齡まいり御やうす承りよろこび入參らせ候。しかしおま〳〵樣御氣色とかく御しかん〳〵不被成御込りなされ候よしさぞ〳〵御難もじ可被成候。春咲にうつり參らせ候へば追々御快らんとぞんじ參らせ候。夫には何卒ちかん〳〵の内殿しま石ふろおぼしめし立せられまじくや。逗藤（山陽の妹お三穂の綜したる先）の方娘も石ふろ望に候て貞松（女歌人）たのみつれまいりくれ候樣に申候所臨ぶんと受合申候へども、つれがあればよろしくと申候。同人も何卒あなた樣に御出候やう申上よと申候。先年も御出被成御相應あそばし候樣貞松申居候。まいり候へばせつく過よろしからんと申候。どふぞ〳〵こなたへむけ御出あそばしこちらに御滯留なされ候やうに御出まち入參らせ候。彌太郎もせつかく其儀申上候樣に申付候。御婚禮も被成少しは御らくに被爲成候間ちと御氣分を御とりはなし御遊へも御出かけなされ候へかしと存參らせ候。先は右御たのみ申上度旨からの御見舞旁あら〳〵申入參らせ候。慮も已筆末ながら御夫婦樣へよろしく御つたへましたのみ上參らせ候。彌太郎も私よりよろしく申上候樣に申聞候。めで度かしく。

後きさらぎ十四日

詠より

慈光院樣

御文のやう詠入參らせ候。まづとや昨日はようぞ〳〵御出ゆる〳〵御めもじいたしよろこび入參らせ候。御歸後御かはらせなく候よしめでたくぞんじ參らせ候。手前みな共有しにかはらずくらし參らせ候。御心易煩しめし被下度候。さて唐紙子御見せ御心に懸られ忝く存參らせ候。佐一郎も忝ながり參らせ候。しかる所昨日の便に両も京へ申つかはしとゝのへ候つもりに相成申候。右の仕合ゆへまづ〳〵御戻し申候。せつかく御心つきの事ゆへとゝのへ申度とも存候へども二重に相成先々此分は自由に候はんまゝこのたびは京にて濟せ申候樣に申居候。扨御まねきの事も申候て忝ながり參らせ候段々先約も有内につかへも御ざ候まゝよき日なみ是より又々申入參らせ候。左樣御承知下さるべく候。御返事迄めでたくかしこ。

廿二日

映雪樣　梅印

御返事

梅颸の隨筆

梅颸夫人は、多趣味で詞藻の豊かな人であつたから、隨筆樣のものもあまた書かれたことゝ思ふが、世に紹介せられたものゝ少いのは遺憾である。茲に掲げるものは、文政二年卯月（六十歳）滯京中、白河樂翁侯の侍臣田内月堂が來訪して、二人の歌人の間に、折柄の杜鵑の話が出て、梅颸夫人が、京にては之を聽かぬが物足らぬと語つたことがある。それが因となつて、文政五年二月、月堂より梅颸夫人に、谷文晁の杜鵑圖に松平樂翁侯の賛を加へたものを贈つた。梅颸夫人は大に喜び、其の情を記して謝したものである。其の時山陽先生も「畫杜鵑行奉謝詞」を作つて感歎驚喜の意を叙べて居るが、其の終に次の如き句がある。

吾亦自章年記君賓　唯願蒼天不變公無疾、杜鵑有無非所慮、吾儕母雛安共巢、哺乳將頼陽春力、不唯此圖比類美與陰橋

ひとゝせ京にまうのぼりける時、かも川のほとりなる裏（山陽）の住ける家にて、自川のみうち視補ぬしにたいめし侍りて物かたりけるうち、此わたりにて時鳥をきかぬがむげに口おしくおもふよしかなりければ、其のち東に歸玉ふ折から、木曾路にてあまたたび聞玉ひけるが、京にてのことおぼし出玉ひ、歌よみて玉はせ、又こなび子規を名だゝる人に畫がゝせ、おほん君の御歌さへかゝせ玉へるを贈り玉はせければ、いとかしこくもうれしくもおぼえ侍りて、永く家につたへふとみ拜み奉らん。かつは遙けき千さとをもことゆへなくものせしを、聞え奉らまほしくやさしみながら一くさをおくり奉るにこそ。

梅　颸

郭公つれなかりしもなかゝに
たぐひまれるおとづれぎきく。

梅颸の和歌（その一）

梅颸夫人は、歌道に精進し、其の一生に詠んだものは數千に達して居る。次に掲ぐるは、前掲歌稿（一）にある文化四年三月〔四十八歳〕夫の弟春風が、九州に遊んだとき詠みて贈としたものである。

千齡のぬしつくしの
かたみんとて出たち玉ふを
おくり參らすとて。

梅　子

まつら潟つくしのうみの
藻塩草かきあつめつゝ
かへるをぞまつ。

道すがら吟詠し玉はん
みやびをおもひやりて。

筑紫人まつらのうみに
かづきせで君がことばの
玉やひろはん

梅颸の和歌（その二）

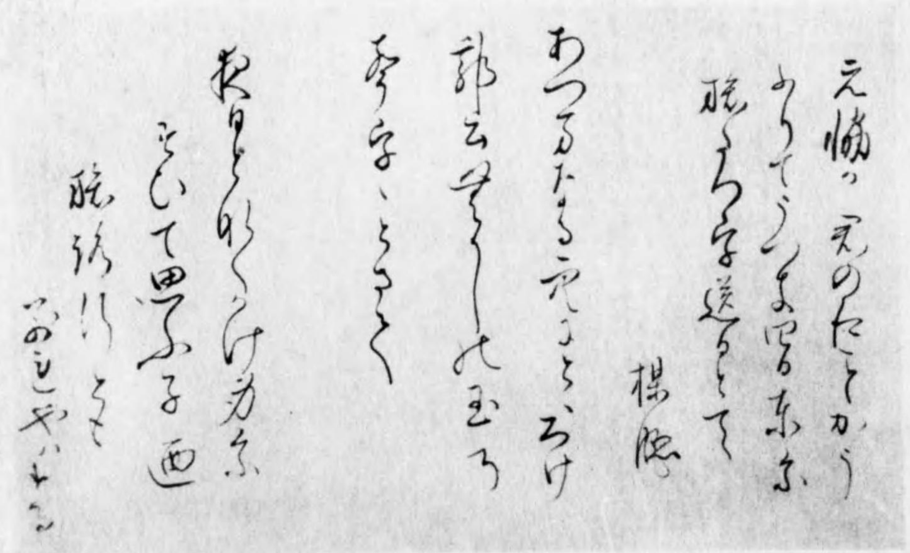
天保二年〔梅颸七十二歳〕四月四日、山陽の長子元協〔通稱餘一、聿庵と號す〕が、藩主淺野齊晴侯の命を蒙り世子慶熾の侍讀として初めて江戸に上らんとするとき、梅颸夫人が詠んで與へた歌である。梅颸夫人は孫聿庵を、生れ落ちた日より母に代りて慈み育てた爲め、兩人の情愛は親子も啻ならぬものがあつた。此の歌は愛孫に對する激勵と惜別の情がよく現はれたものである。

元協が君の仰ごとかう
ふりて、うづき四日東に
旅たつを送るとて。

梅　颸

あづまなる空にとゞろけ
郭公むかしの　玉の
聲をゝとさで。

夜日となくかげ身に
そひて思ふ子の
旅路行とも
別れやはする。



梅颸の短冊

右なるは寛政九年三月十二日梅颸夫人三十八歳の時、山陽先生（十八歳）が江戸遊學の爲め出發の際、贐として詠んで與へ、忠孝の二義を深く訓へられたものである。山陽先生はこれを三ツ折にして大切に携へ、途中竹原より母に贈つた第一信にも「出立前頂戴被仰付候御歌度々吟詠道中にても不絶思出し申候」と述べて居る。此の歌に關しては前掲梅颸日記（その三）にも現はれて居て、山陽先生の思想の根柢を培ふたものである。（中及左は年代未考）

はじめて東にゆく
子を送りて

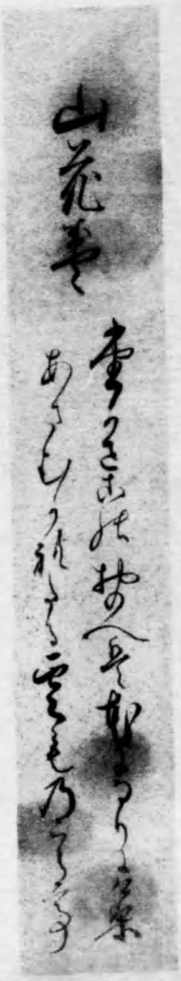
不二のねもあふみのうみも及なき
きみとちゝとの恵わするな。

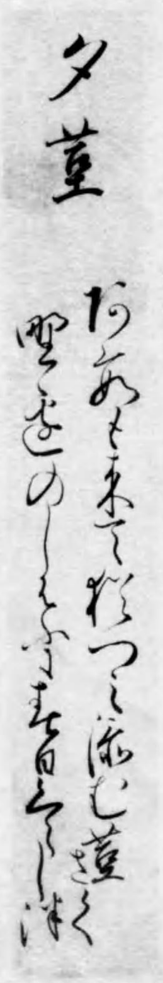
山花盛

たかさごのおのへは花になりにけり
あざむかれたる雲ものこらで。

夕堇

あすも來て猶つみ添む堇さく
野邊のしばふに春日くらしつ。





梅颸の式紙（その一）

文政二年二月廿四日梅颸夫人六十歳の時、山陽先生〔四十歳〕が九州遊歴の歸途急に思ひ立ち、母を奉じて歸京することゝなつた。其の出立の日母の詠みたる歌にて前掲梅颸日記（その五）に記してある。

のぼる〔襄〕がみやこの花みせんと具して行んとす雨のふ（る）日出たつとて。

行かたの花に
おくれじと
春雨に
しゐて出たつ
旅ころもかな。

梅　颸

梅颸の式紙（その二）

（年代未考）

有隣ぬしの家に、やまとうたのつどひありけるが、おのれもものせよとそゝのかされ侍るまゝ、まかでけるに、何くれのあるじまうけはさら也、ちかきとし、家つくられたりけるが、物どのみのあらまほしく、たよりおかしくしなされたり。けふの歌よみけるつゐでさのこしをれたがら荷なひ出せるは。

住人のこゝろのおくも見るばかり
　ゆたけく廣き家作りかな。

春秋のとみはもとよりゆたけさの
　はかりしらるゝ君がやどかな。

楳颸

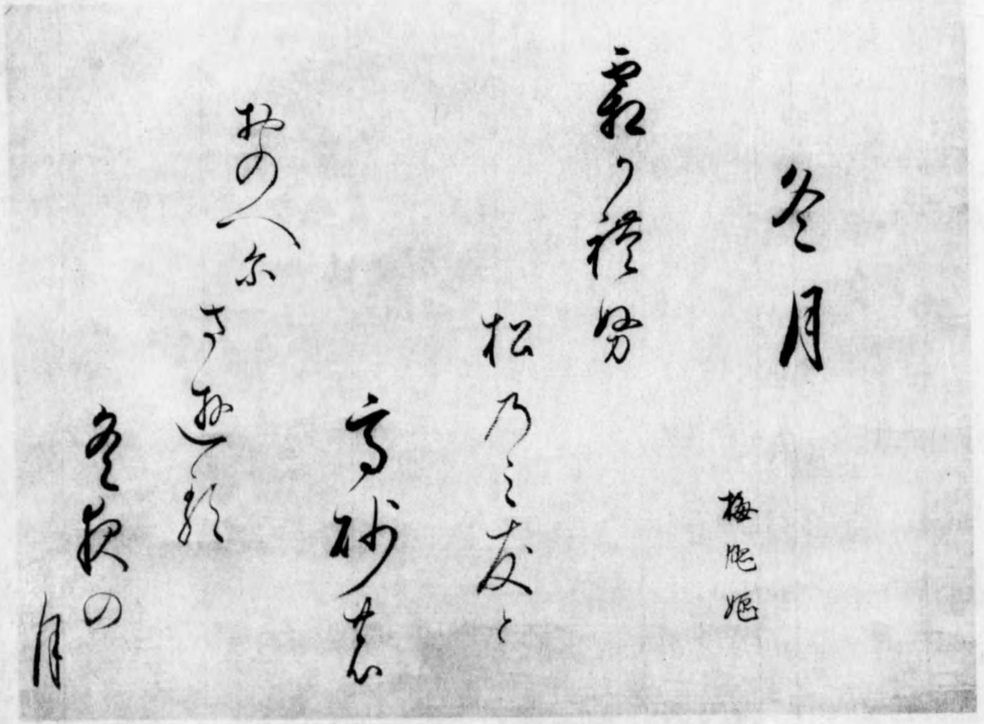
梅颸の式紙（その三）

（年代未考）

冬月

梅颸嫗

霜かれぬ
松のみ友と
高砂の
おのへに
さゆる
冬夜の
月



67
539

昭和十三年二月十八日印刷
昭和十三年二月二十三日發行

廣島市袋町五十五番地ノ一
編纂兼發行者　財團法人賴山陽先生遺蹟顯彰會
代表者　常務理事　大田清

廣島市八丁堀四十六番地
印刷者　新庄良輝

廣島市袋町五十五番地ノ一
發行所　財團法人賴山陽先生遺蹟顯彰會
電話五三一九番
振替廣島六〇〇二番

不許複製

67
539

終